「信州 知の連携フォーラム（第2回）」報告
～コンテンツの再価値化：地域の文化資産を繋ぎなおし、読み解きなおす～

森　い づ み（信州大学附属図書館）

はじめに

2018（平成30）年2月22日（木）、信州大学附属図書館中央図書館セミナー室を会場に、「信州知の連携フォーラム（第2回）」が信州大学附属図書館、県立長野図書館、長野県信濃美術館の主催、長野県立歴史館の共催、長野県の後援により開催され、約50名が参加した。

当フォーラムは、長野県における文化的情報資源を収集・蓄積・提供する公共機関であるMLA（Museum, Library, Archives）が連携して「信州における価値ある地域資源の共有化と知識化・発信を通して地域住民の学びを豊かにし、地域再生につなげていく」ための方策を議論することを目的として、平成28年度から実施され、今回が2回目となる。

第2回フォーラムは、テーマを「コンテンツの再価値化：地域の文化資産を繋ぎなおし、読み解きなおす」と定めた。ここでいう「再価値化」は、各機関が既に所蔵しているモノ（＝「機関アーカイブ」）を従来とは別の視点から見てみることを意味する。さらに「機関アーカイブ」を越え、失われつつあるもの、存在が知られていないものも含め、ネットワーク化されたデジタルの世界において今後どのようにモノ・コトをアーカイブしていくのかを検討対象に含めることとした。また、「地域の文化資産を繋ぎなおし、読み解きなおす主体」としての「担い手」の確保・育成を検討することとした。

当日は、冒頭の挨拶で、渡邉匡一信州大学附属図書館長（以下、渡邉館長）から、長野県内でMLA連携を考える機運が高まって来た背景として、「デジタルな世界が既に来ていること、それによってこれまで対象にしていなかったコンテンツも増えてきている状況や、記録されないまま失われつつあるモノもあること」が述べられ、「個別の活動だけではなく連携していかなくてはならないという課題意識が芽生えた。参加者の皆さまと共に考えていく場にしたい」という、フォーラム開催の趣旨が述べられた。

第1部トークセッションでは、青木隆幸長野県立歴史館学芸部長（以下、青木部長）、松本透信濃美術館整備担当参与（以下、松本参与）、平賀研也県立長野図書館長（以下、平賀館長）、渡邉館長から各館固有の取組を紹介したうえで、信州におけるMLA連携への期待を述べた。第2部は渡邉館長をモデレータとして、フロア及び信州大学人文学部の金井直教授からのコメントを交え、ディスカッションを行った。以下にその内容を報告する。

本稿の取りまとめに当たっては、各登壇者の発表・発言の意図を汲み、その場の雰囲気を可能な限り再現することに努めたが、文章での読みやすさを配慮して、要約や言い換え、補足等を行っていることを予めお断わりする。

なお、当日の発表資料は、信州大学の機関リポジトリSOAR-IR[1)]で公開している。

１．【第1部】トークセッション

１－１．「田中芳男という試金石」

（長野県立歴史館学芸部長 青木隆幸）

図１．長野県立歴史館学芸部長 青木隆幸氏

歴史館では現在、博物館の父と呼ばれる田中芳男の展示『田中芳男－「虫捕御用」の明治維新－』[2)]を行っている。その調査をする中で考えたことを中心にお話するが、正直なところMLAについてはよく解っていないので、まずは歴史館がこだわってやってきたことをお話したい。その中で、MLAに繋がる部分があれば乗せていただきたいと考えている。

「田中芳男の試金石」というタイトルは、歴史館がこだわっていることと田中芳男がこだわっていたことが重なると考え、田中芳男を克服できるかということを自分への宿題として設定した。

歴史館は、様々な古文書や行政文書の目録、展示の目録といった歴史情報を発信する発信地である。しかしそれだけではなく、情報を受け取った人々が歴史館を訪れるという意味において、発信地であると同時に終着地でもあると考えている。例えば、歴史館に保存されている縄文期の人骨を子供たちが見学したり、古文書を読み解く講座を行っている。様々な年齢層の人たちが、実際の古文書（コンテンツ）に触り、学んでいる姿がある。このように、流した情報が最終的に歴史館を訪問した人々のリアルな表情として見えるというのが、経験上とても重要なことである。歴史館は、情報も大切だが、目の前に本物を置き、語るという行為が無ければ成立しない場所だと思っている。歴史館は常に、訪れる人々に対して思いを語ることでコミュニケーションを取る場所である。これがつまり、情報の終着点ということであり、その終着点には笑顔や涙があってしかるべきだろう。数年前に開催した『長野県の満州移民』という展示では、3万3千人分の名前、年齢、生還・死亡年などの情報をリストアップした。展示を見た人からは、「この人は実際に自分と一緒にあの集団自決の場所にいた人だ」とか、「これは私の親父だ。親父は満州のことを何も語らないまま死んだが、何処にいたのか知りたかった」という声が聴かれ、そこには涙があった。歴史館では、人々の真剣なまなざしや笑顔、涙があることを生きがいにしている。歴史館で働く喜びはここにある。情報の終着点はコンピュータではない。情報を汲み取るのは、最後は人間だと思う。MLA連携においても、原点には「人間とはどういう生き物であるか。何を考えるのか」ということをまず問うことが必要なのではないだろうか。

皆さんに問いかけたいことがある。赤ちゃんの前にボールを転がすと、どんな行動をとると思うか？人間、犬、猿、猫の赤ちゃん、何でもいい。お隣同士話してみてほしい。実は、人間の赤ちゃんだけしか取らない行動がある。「笑う？」そうではない。しかし笑うということも重要。人間であることの証明とも言われる。「追いかける？」そう、追いかける。しかし、実は人間の赤ちゃんだけは、追いかける前に「振り返る」のだ。このボールが”どこから”来たのか、と。人間という動物は、「我々がどこから来て何処へ向かうのか」を知るために振り返るという特徴がある。では次に「夜空の向こうには何があるか？」「夜空の向こうには星がある、宇宙がある」という答えもあるだろう。しかし人間は、「夜空の向こうには”明日がある”」と考える。明日を想像するために歴史を振り返るというのは、人間の原点である、そこに、歴史館が存続できる理由があると考える。

さて、今日のテーマである「コンテンツの再価値化」とは、具体的にどういうことだろうか。ここに一枚の絵図『筑摩県絵図』を持ってきた。皆さんはこの絵図からどのようなメッセージを受け取るだろうか。同じように一枚の博物図画、田中芳男展が監修した『教草（おしえぐさ）澱粉一覧』を置いてみる。MLA連携という営みは、このコンテンツをどう読むだろうか。歴史館の仕事は、こういうものと格闘する仕事である。それぞれの館が持つそれぞれの資料をどのように人々に伝えていくか、がMLAの役割だと思うので、ご意見をお聴きできれば嬉しい。

田中芳男の展示に取り組む中で、田中芳男がMLA連携の種を蒔いたのではないかと思うことがある。明治の初期150年前～100年前に、博物館を通して「知」を拡げようとした人物の挑戦をぜひ観に来て、自分の感性で捉えてほしい。田中芳男は上野の動物園を造った人物だが、彼が最も力を入れたのは神宮徴古館農業館で、『根菜類聚』の絵を展示した。我々は、博物館・美術館をイメージする時に、ガラスの向うに、優れた名の通った芸術品が並んでいる姿を想像しないだろうか。それに対して田中は、「大根の絵があって何が悪いんだ」というメッセージを発信した。田中にとっては、どこまでも身近にあるもの、生活の中にある愛すべきものが文化財だった。また、今回の展示の目玉として、魚の形の「ラベル立て」を展示している。田中は「附け札の名前なども、むずかしい字が書いてあっては分からぬ。知らぬ人は仕方ない、貴様のほうが悪いのだという」（田中芳男『経歴談』）と言っている。田中芳男は博物館を創ったが、その後の博物館はどんどん上から目線的になって、来た人が解らないというのを、解らないお前が悪いんだというようになっていった。しかし田中は、解るように伝えられない自分たちが悪いのだ、徹底的に解りやすく伝えなければならないということを常に考えていた。情報の終着点は人であり、誰をどう動かしたいのか、ということである。どこまでも、人とモノに寄り添う信念があったこと、博物館の父である田中芳男の原点がここにあるということが、今回展示した作品の中から見て取れると思う。

『新橋芸妓照葉とリンゴ』をご覧いただきたい。当時のアイドルであった照葉は、なぜリンゴの皮を剥いているのか。田中芳男は、江戸の末期、食べられない和リンゴに西洋のリンゴを接ぎ木して食べられるリンゴを作り、苗を配り、それが信州のリンゴの元になった。田中のリンゴの改良は、本としては『有用植物図説』という形にまとめられる。美術としては田中自身が描いた

絵があり、リンゴとは何かという書『果物之美観者文明之装飾 果物之美味者開化之食餌』も残している。まさに、図書館もあれば美術館もあれば博物館もある。そのすべてが、照葉が持つリンゴに具体的に収斂されているように思う。様々な情報・データが、最終的には手の中に納まるリンゴという実体に向かっていくように、M・L・A全ての営みの終着点が具体的な形・味として人々の心を動かすものになって欲しいと考えている。

図２．青木氏 発表スライドより

最後に、『筑摩県絵図』に戻る。歴史館は、いわゆる本物の歴史的な財産を保存・保管する使命がある。必ずいつか、この絵図を読み解いてくれる人が現れるだろう。そのために私たちは保存し続け、フェイス・トゥ・フェイスで語り合い、学び合える場を作りたい。

今日お話ししたのは、MLA連携の大前提として、博物館がこだわっていることを理解していただき、そのうえでMLA連携を作っていただきたいということだった。以上です。ありがとうございました。

（司会）本日の信州知の連携フォーラムの最初の話として、とても印象的だった。「情報の終着点は人」、「MLAによって、具体的なモノに対してどのような読み解きができるのか」という問題提起をしていただいた。

１－２．「美術館の内なるMLAトライアングルについて」
（信濃美術館整備担当参与 松本透）

図３．信濃美術館整備担当参与 松本透氏

美術館の内なるMLAトライアングルについて、という表題をつけた。図書館、アーカイブ（文書館）、美術館、MLAが連携に向けて一つの三角形を形成している。左側の大きい図が、外なるトライアングルである。そして、図書館、文書館、美術館それぞれが内側にMLAを抱えている。これについて、美術館サイドからお話しする。

MLA連携とは、1980年代にアメリカで起こった問題提起のようである。

水谷長志氏（今日も会場に来られている）は、折に触れてこの問題について執筆されているが、当該文献[3)]が自分にとって初めてこの概念を知ったものであると同時に、本文がネットワーク上で読めるので引用させていただいた。

図についてコメントする。

一つは、MLAを3つの円のベン図で表現しているが、これは少々語弊があるのではないかと思っている。すなわち、美術館は図書を所蔵し、作家の手稿類や日記を持っているという意味では、MLAが重複する部分である。しかしこれは、収集品目の重複の話であって、連携の話ではない。本当は、それぞれの間に双方向の矢印を入れたチャートを作ったら、本日のフォーラムのサブジェクトに相応しかったかもしれない。

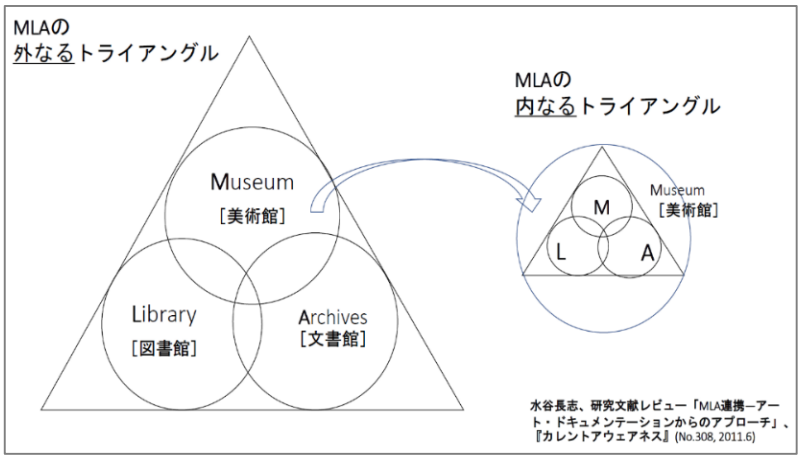

図４．松本氏 発表スライドより

組織としては、3つの円が重ならずに独立し、その間に連携があるのだが、それを可能にしているのは言うまでもなく近年のコンピュータで、文字データや画像データ、音声データなどを連携させる可能性が出てきた。これが非常に大きな推進力を持っている。これが二つ目のコメントである。最後に、右側の内なるトライアングルの図はMの中の内なるMLAを描いているが、それぞれが同じように機能しているわけではないと思う。例えば、図書館に美術館で持っていた方が良いような美術品や、文書館で所蔵しているような文書があることもあるだろう。しかし、おそらく図書館での仕事は、わざわざ美術館で調べものをしなくても成り立つのではないか。一方で、美術館や博物館も、図書館と同じように本が無いことには研究も調査もできないわけだが、アーカイブの人が美術館で調べものをしなければ仕事にならない、とは考えられない。ところが、美術館は図書が必要なのは当たり前だが、ある一定以上に絵画や彫刻などを調べようとすると、作家の残した一番直接的な図像、或いは手稿などが必要になる。つまり、MLAそれぞれの内部に同じ形でこの関係が成立しているわけではない。

一方、実際の展示会や展覧会においては、一種の競合状態が2～30年前頃から起こっている。いわゆる文学館の英語名を見ると、Museum of literatureという名称を使っているようであるが、基本的に文学館はアーカイブだと思っている。ところが、例えば世田谷文学館では、映像的な作品を手掛けたり、空間的に凝ったインスタレーションを扱う展覧会なども実施している。数年前にはマンガの岡崎京子さんをやっていた。美術館の縄張りではないが、中間的な領域のことを手掛けている。もう一つ、Mの中核的資料・収集品目としての美術品、Lの中核的な収集品目としての図書は、カテゴライズしてデータベースに載せるのに十分な分類やメタデータの付与が行われてきた。ところが、美術館サイドが持つアーカイブをデータベース化しよう、ホームページ上で

公開しようとしても進まない、という状況がある。

次に、アーカイブ性の強い施設、つまり狭い意味でのMLAどれにも位置付けにくい施設をいくつか挙げる。例えば、早稲田大学演劇博物館は、中核となる対象が「上演」なので保存ができない。記録を写真やフィルムで撮る、あるいは台本、舞台美術、衣装のようなことになる。似た事情は、慶應義塾大学アート・センターの舞踏・舞踊にもあるし、東京国立近代美術館フィルムセンターにもある。建築的な仕事や庭園に関わる仕事なども、そのものは収集・保存できないので、関連資料を収集し研究するという形になる。一方、映画は収集できる。映画につきもののスティール写真や映写機器、台本なども選択せずに全文収取するというポリシーを持ち、書き込みがあれば同じ台本も保存する。国立近現代建築資料館は解りやすい。建物は収集・保存できないので、図面や設計のために付随する模型などを集めている。最初から悲観的なことを言うのもなんだが、文学館はまだ整理がしやすいかもしれないが、同じアーカイブのカテゴリーだからと言ってどうやって共通のフォーマットに載せるのか。分類項目はどうするのかと考えると、ライブラリーやミュージアムの収集品目の整理とは違った難しさを持っているのがアーカイブではないかと思う。

ところで、美術館においては、画家の日記や手帳類、作品を撮った写真や家族アルバムなどがアーカイバルな資料であるが、中間的なものもある。例として、信濃美術館の収蔵品で、河野通勢という画家の作品を2点挙げる。どちらも舞台は裾花川で、河野は若いころそこで写生をしていた。河野はギリシャ正教の信徒で、日本の川を舞台にしつつ、左の絵はアダムとイブという聖書的な主題を描いている。右は『裾花川の河柳』で、さらに右側はその完成作直前の下絵であるが、問題は下絵に書かれた文字（画家本人の文章）で、書き起こしがある。読んでみると、絵には直接関係が無い。20歳前後にこういった一連の作品を描いていたその背景にあった作家の思想や心情といったものと考えられる。もし、内容が少しでも作品に関係があれば、本作に至るまでの過程を言葉にしたもの、研究する場合にはそれを手掛かりにして本作を理解する手立てになるだろうが、そうではない。ビジュアルな図像と文字情報が同居した中間的な存在だということになる。

次に紹介するのは、東京国立近代美術館の所蔵品目録（『岸田劉生 作品と資料』）である。作品の他に、画稿、日記・手帳、書簡、写真などが収録されているが、英語タイトルを見ると”Work and Archives”と書いてある。美術館で出版された、”Archives”という言葉が出てくる一番早い出版物だと思われる。

さらに、「美術館における”アーカイヴ”の定義」をニューヨーク近代美術館（MoMA）の事例で見ていく。4つの側面（A1 MoMAアーカイヴズ、A2 個人的および職務上の文書、B 20世紀の手稿コレクション、C MoMAの記録）から定義しているうち、一つめを訳してみた。「美術館の部局もしくはプログラムの現在のものではない記録の中で、美術史的或いは世界政治的価値や研究に値する潜在力や法的な重要さゆえに、永久保存すべきものとして選ばれた記録。それらには、手書き資料、美術館イベントの視聴覚記録、マイクロフィルム、オーラルヒストリーなどが含まれる。」例えば、「事業記録及び文書」がAからZまで並んでいるが、個々の資料が非常に膨大である。他のカテゴリーとして、「MoMA以外の組織および個人の記録（A～Z)」、「未処理の記録、部外秘の

記録、収蔵予定の文書」がある。Barr, Jr.の文書を開くと17のカテゴリがあり、しかも一つのカテゴリがサブシリーズとしてさらに分類されている。例えば書簡というカテゴリはさらに3つのカテゴリに分類されており、そのうち一つだけでも637通ある。

絵の実例からMoMAのアーカイヴの定義まで拡散してしまったが、最後にいくつかの所感を述べたい。文字情報、オーラルヒストリーのような音声、図像のデータ、これらが連携できるのはひとえにメタデータが付いていて、検索ができるからである。MoMAにあるアーカイブは膨大である。それらの中身を閲覧させられるかの問題もあるが、それらにデータ（例えば手紙であれば誰から誰への手紙かといった、同定するためのデータ）を付与しない限り連携はできない。これを全米の美術館がやっているのかと思うと、本当に大変な仕事だと思う。自分が信濃美術館のアーカイブを調べようとしたとき、つい過去のものを調べようとしたが、MoMAは20世紀の作家がまだ生きている時点で、手に入るものを無差別にしらみつぶしに、全部集めて未来に送っていくということをしている。このベクトルの違いが気になる。今後の日本のMLA連携を考えるにあたり、考えさせられた。もう一点は、アーカイブの無差別性（捨てられない）ということで、そこに価値が生ずるとすれば、ある作家の作品を他のものと結びつかせることによって、ある作品を新しい解釈で生かすものが、アーカイブの資料ではないかというように考えている。

（司会）我々は、MLA連携という時に、M・L・Aのそれぞれが、あたかも単一の性質を持つようなイメージで語ってしまいがちだが、それぞれの中にいかに豊かな多様性があるのか、ということを思い知らされた気がする。そこに、難しさと面白さがあるという印象を持った。

１−３．「師範学校蔵書の博物的意味を探る ： コンテンツの再価値化の試み」（信州大学附属図書館長 渡邉匡一）

図５．信州大学附属図書館長 渡邉匡一氏

師範学校蔵書の博物的意味を探るというタイトルを付けた。信州大学には師範学校関係の資料が残されているが、これらは本としてはほとんど価値を失っているものなので、通常は図書館としては残せない。ではどうしようか、と考えながら作業をしてきたことについて、報告したい。

長野県内には、明治6年以降いくつかの師範学校が設置され、現在の信州大学教育学部に至る。その間に蓄えられた書籍の一部が赤煉瓦館に所蔵されていたが、2014年11月に発生した長野県北部地震で書架が転倒し、壁や床にも破損が生じたため、中央図書館に運んで整理を行うことになった。現在は、中央図書館の3階に段ボール詰めして置いてある状況となっている。これらを図書館の蔵書として

取扱うには、問題が2点ある。1点目は古い書籍が多く、経年による破損・汚損が甚だしいことで、利用するためにはある程度の補修が必要な状況である。2点目は、信州大学及び他の大学の所蔵との重複が多いことで、収蔵スペースの狭隘化が問題になる中、新しく入って来る書籍を置くためには、重複している図書は置いておけないという状況がある。つまり、せっかく昔からある本であるにもかかわらず、大学図書館の蔵書としての価値は低下しており、行きつく先は除却の対象ということになる。個人的には、大きな箱を作っていくらでも本が置いておけると良いと思うが、現実的にはそういうわけにもいかない。

ただし、中にはまだまだ書籍としての価値を持つものもあるので、希少価値があるものを2件ご紹介する。1点目は児童文学者であった千葉省三の『地蔵さま』という童話集で、実はCiNii Books（全国の大学図書館等の蔵書データベース）で調べると日本の大学はどこにもなく、天津大学で一冊所蔵していることがわかった。また、公共図書館については、国立国会図書館サーチで調べると鳥取県立図書館のみの所蔵であった。2点目は、栗岩英治の『素描 上杉謙信』で、大学図書館には所蔵は無く、県立長野図書館ほか2館が所蔵するのみとなっている。栗岩氏は『信濃史料』刊行の基礎を作った郷土史家で、長野県にとっては重要な人物である。このように希少価値がある本がいくつかはあるので、何とかしていきたい。

では、それ以外はどうするのかについては、博物資料として歴史的な価値を見出したいと考えている。これらの書籍には、師範学校時代、特に「学友会」関係の多くの蔵書印が押されている。「学友会」とは学生たちで作る自治組織で、そこが本を集めていた。蔵書印は組織の変遷に応じて変えていたらしく、調査の結果全部で36種類あることがわかった。例えば、スライドに挙げた3種類のうち、左側のものは明治31年に学友会が本格的に動き始めた頃におそらく使っていた蔵書印である。真ん中のものは「報国会」の印で、戦時中のものということが解る。師範学校に限らず（旧制高校等も含めて）、さまざまな自治会が一様に「報国会」という名称に切り替わっていった時期があり、蔵書印も変わった。さらに右側のものは（私はかなりこの蔵書印が気に入っているのだが）、本来であれば長野県となるべきところ、「県」が抜けている。これはおそらく、師範学校が昭和18年に県立から官立になった際に削って使ったのだろうと想像がつく。こうして、蔵書印を調べることで歴史の移り変わり、それぞれの組織でどのような書籍を集め、どのようなことを勉強しようとしていたのかということが解る。他にも、共有物なのであまり多くはないが、「書込み」のある書籍がある。どのように勉強したか、あるいはどのような読み方をしたのかということを知るうえで、読書の歴史がうかがえる資料としての価値を見出したい。

段ボールに詰められた本のうち、師範学校、学友会（報国会）の蔵書を抜き出すにあたっては、本の小口の部分が赤く塗られているので、それを一つの目安として選別作業を行った結果、対象は1,048冊となった。これらを目録化しつつ、書籍としての価値（希少性）と、博物的（歴史的）な価値（書込みと蔵書印の2点）の計3点を引き出していく作業、すなわち再価値化を行った。

次に、師範学校の学友会について詳しく見ていく。学友会とは学生の自治組織で、明治22年に創設されるが、本格的な活動が始まるのは明治30～31年だった。集会部・尚武団・図書部の三部局を設け、明治31年には雑誌『学友』を創刊する。『学友』の創刊号を見ると、「文庫を設置」と

いう文章が見られ、この年に文庫ができたことが解る。実は『学友』は教育学部の図書館にしか所蔵されておらず、国立国会図書館にも一部しか所蔵されていないこともあって調査が十分ではないのだが、図書部の動向については、「学友会図書部購入図書一覧」や「図書閲覧統計」が掲載されているので、毎号調べて行けば全体像を明らかにすることができるだろう。ちなみに、昭和7年度の9ヶ月間の閲覧統計（蔵書数3,075点）について分類別に見ると、文学類が圧倒的に多いという結果になった。この『学友』の目次は、教育学部のホームページで近々公開[4]することになっているので、どのような内容が掲載されているかは一覧できるようになる予定である。大学、或いは図書館としては、こういった資料は使ってもらうことが大事なので、積極的に情報公開をしていきたい。なお、師範学校は非常に複雑な変遷を持つが、実際に学友会蔵書に関わるのは、長野県師範学校（明治16年）～信州大学教育学部に至る部分だった。また、目録の項目は、タイトル、著者、刊行年月日、希少価値、状態、書き込みの有無、蔵書印（36種）の有無の7種類とした。ちなみに、この目録の原型は、ベトナムがフランスの植民地だった時代に「極東学院」という施設ができ、日本の書籍も多く所蔵されていた。その整理をするために作った形式である。

ここまでの話をまとめる。

①学友会の蔵書の目録を取りながら、希少価値のあるものは信州大学の蔵書に加え、書籍としての価値で使ってもらう。

②蔵書印のあるものは状態や分野で選別を行ったうえで、書き込みのあるものと共に博物的・歴史資料として残すことで、書籍としての価値が希薄になってきたものを異なる価値に置き換えて整理していく。

③残りは除却ということになるが、目録があるので当時所蔵していた総体をバーチャルで復元することはできるし、本学あるいは他大学の図書館で利用することはできるだろう。

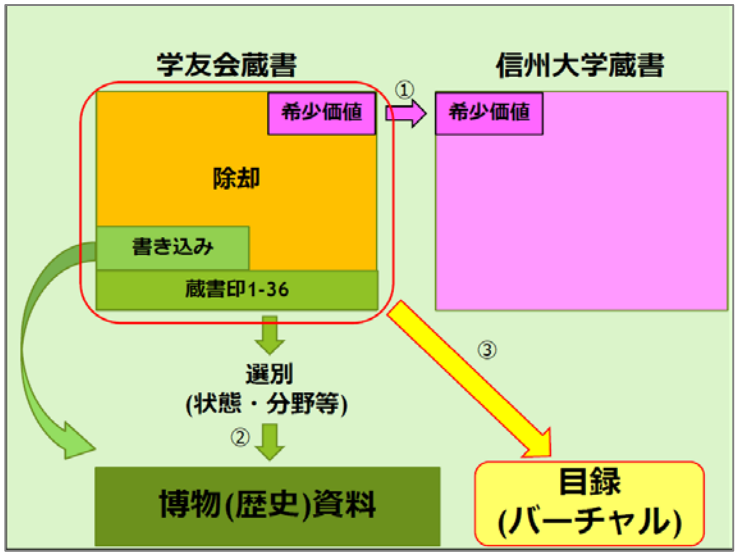

図６．渡邉氏 発表スライドより

自分の基本的な考え方として、研究者や特定の人間が「こうですよ」と提示することは大切なことではある。一方で、皆んなで考えるということもとても重要で、楽しいことだと思っている。価値を考えたり提示したりする機会が、いつも図書館や博物館、美術館の側にばかりあるのは、良くないのではないか。これは自分が研究者としていつも思っていることでもある。この楽しみを共有し、皆んなで新しい試みを可能にしていくためにも、目録やさまざまな形のデジタルコンテンツが外に出ていくようにしないといけない、という考えも含めてお話をさせていただいた。

（司会）本日のフォーラムのテーマである「コンテンツの再価値化」について、一つの具体的な

モデルを示していただいた。また、青木部長から「情報の終着点は人だ」という話があったが、いつも「館」に所属する我々の側からということではなく、受け手となる「人」の側から始まる、受け手が主役になるようなMLA連携の形が見えてくると良いのではないか、と感じた。

１-４．「コンテンツの再価値化－地域の文化資産を繋ぎなおし、読み解きなおすー」（県立長野図書館長 平賀研也）

図７．県立長野図書館長 平賀研也氏

最初に事務連絡です（笑）。ここでTwitterやFacebookでつぶやいている人へ。ハッシュタグは”#信州MALUI”。実際に今、中継してくれている人がいる。というわけで、皆さんが話していることが、即座にデジタル情報になって共有されている。これも一つのMLA連携、と言うには広すぎるかもしれないが、ぜひ感想など上げて行ってもらいたい。

本日の投影資料は、配布していないが、Slide Share上にCC BY-SA（クレジットを表示、継承するという条件で、どのようなメディアでも共有・翻案が可能）で公開しているので、探していただきたい。ところで、第1回のフォーラムに参加された方は？それほど多くは無いようだが、第1回の配布資料なども信州大学のSOAR-IRから公開[5]されており、県立長野図書館の「図書館フォーラム」というサイトからもリンクしている。本日、終った後に見てみていただきたい。

まず、前回を振り返る。そもそもMLA連携（或いはMALUI連携）とは、「それぞれの強みを活かして」「電子情報の共有化と新たな発信」を行うものである。そのために必要な「新たな人材」とはどのような姿なんだろう、ということを渡邉先生たちと一緒に考えて来た。その中で、ライブラリー（図書館）は記録することに強みがあるのではないか。アーカイブ（文書館）は保存すること、ミュージアム（美術館・博物館）は意味づけること、そしてユニバーシティ（大学）は調査研究することに強みがあるんじゃないかと仮に位置付けて、それを一緒に考えて行きましょうというところから始まった。

「MLA連携はデジタルがキモ」である。中でも、図書館は公開することが大前提の組織（機能）である。情報の入口（ポータル）があり、アクティブな利用者がいて、情報要求に応えるレファレンス人材がいて、デジタル情報化も行っているという意味で、図書館は最も進んでいる状態だと考えている。具体的には、県立長野図書館としては信州の「知のプラットフォーム」を平成32年の年頭から提供する予定で準備を進めており、皆さんと一緒に取り組んでいくためにも、この「信州 知の連携フォーラム」の場を活用させていただいている。プラットフォームとはどのよ

うなイメージか。各市町村や大学の図書館システムでは、所蔵している資料の書誌情報（メタデータ）を持っていて、単館ごとではなく全件の情報が横断検索できるようになっている。図書館システムには、アートライブラリーの所蔵情報なども入って来ることを想定している。そして、博物館は所蔵品をデジタルアーカイブの情報（メタデータとデジタルイメージ）として持っている。さらに、教育関係のデータベースといったものもある。これらをどうやって一緒にして「信州デジタルコモンズ・ポータル」として統合的に探し出し、一次情報（資料そのもの）にアクセスできるようにするか。そして、二次利用をすることができるのかを検討している。集めて来たものは、市民視点・活用視点で「公開」と「活用」ができることが重要で、今日の議論も生かしていきたいと考えている。

今日の本題に入る。「コンテンツの再価値化」とは、誰がどのように「公開」し「活用」するかということに他ならない。県立図書館としては、その基盤をどのように整えるかという視点から話をしたい。現在、国家的な戦略として内閣府を中心に「デジタルアーカイブジャパン」構築の議論が進んでいる。真ん中に国立国会図書館（NDL）による「国の統合ポータル”ジャパンサーチ（仮称)”」が据えられ、既存のNDLサーチの拡張版が検討されている。これまでのNDLサーチは、NDLの中のものや県・政令都市が持っているものが中心だったが、新しい構想では、書籍やメディア・芸術分野、文化財分野に加え、地域分野のものも、ここから探し出せるようにする状態を作りましょうという話が進んでいる。内閣府の知的財産戦略推進事務局が詳細な資料[6)]を出しているので、見てみてほしい。

このように、情報の入口はNDLが用意するが、さまざまな情報を何もかも一ヶ所で集めようとしているのではない。それぞれの持つ情報を集めるために、例えば「信州」という範囲の「つなぎ役」がほしいのだということを言われている。「つなぎ役」に期待されているのは、「信州のコミュニティをまとめ、各アーカイブ機関が提供する資源の共有化を図る」こと、「地域内外のメタデータの共有化に加え、分野内のメタデータの標準化、用語の管理などを行う」こと、「コミュニティ内の長期アクセスを保障する基盤提供の役割を担う」ことなどが挙げられている。別の観点では、「公開ポリシー」や「二次利用をする際の条件の表示方法（クリエイティブ・コモンズなど)」「データをなるべく二次利用可能にするためのオープン化の推進」「利用上の留意点（肖像権など)」といった話もアーカイブ機関とつなぎ役が調整することが求められている。一方で、公開された情報を活用する人とつなぎ役の間での調整は、「付加情報の付与」の条件や「情報間の関連付け（例えば画像情報と書誌情報)」「利用成果物の還元（例えば、先ほど出て来た『筑摩県絵図』を使って何かを意味付けた成果物が出来たら、情報公開元に戻してあげる)」「(活用をしようと言っても進まないので）活用のためのコミュニティを地域で担ってほしい」といったようなことが挙げられている。一方、信州における地域情報資産をめぐる現状は、本に関しては、長野県内の市町村立図書館や信州大学附属図書館の蔵書データはほぼ電子化され、それを統合的に探す仕組みは県立図書館が提供しており、自宅などから居ながらにして探すことができる。また、信州デジくら（「長野県デジタルアーカイブ推進事業」の愛称）は、現在はあまり活用されている状況ではないが、2015年にサイトをリニューアルし、県立歴史館、県立長野図

書館、信濃美術館・東山魁夷館が所蔵する作品、歴史的な資料や動画などのコンテンツは引き継がれている。さらに、信州大学では「近世日本山岳関係アーカイブ」が公開され、市町村や民間などでも、それぞれのコンテンツを公開している。ナショナルな枠組みで構築されているデジタルアーカイブの中にも、実は信州のものが入っているので、紐付ける必要もあるだろう。例えば飯田市立図書館では、本をキーワードで検索した際に、自館の所蔵情報だけではなく、NDLが持つ書影のデータなども併せて表示する仕組みを作っており、飯田地域の「つなぎ役」を意識されている事例だと思う。

一方で、非常に憂うべきことも起きている。写真は伊那市立図書館の隣にあった土蔵が壊されている様子である。江戸時代以前のものは保存する意識もあるが、この150年間の近代の資産は、世代交代が進む中でどんどん失われてしまっている。ナショナルアーカイブを「正倉」とすると、地域には「郷倉」「土蔵（穀物倉）」といったレベルがある。こうしたレベルでの活動が起きなければ、地域の貴重な資料は失われてしまう。国レベルでデジタル化する文化財や公文書、書籍は氷山の一角にすぎない。都道府県レベルでもアーカイブを作っているところはあるが、「信州デジくら」[7]のように続けるのが難しいものもある。市町村レベルでは財政的に余裕のある所もあるが、コミュニティレベルや個人（家族）レベルでは、認知すらされていないものが山のようにある。そのような中で、中間層の都道府県レベルに期待されていることもあるが、予算なし・人なし・技術なし・情報なしの状況で、「機関アーカイブ」はなかなか進まない。

なぜこのようなことになるのか。国レベルで整備されているものは、これは良いもの、大事なものというように「意味付けられて」いて、「学ぶ・教える」という対象である。「保存する・検索する」ことは出来るが、自分で活用するというよりは「与えられる」るものである。「生活文化圏」単位のデジタルアーカイブを機能させるには、これを逆転させなければならない。

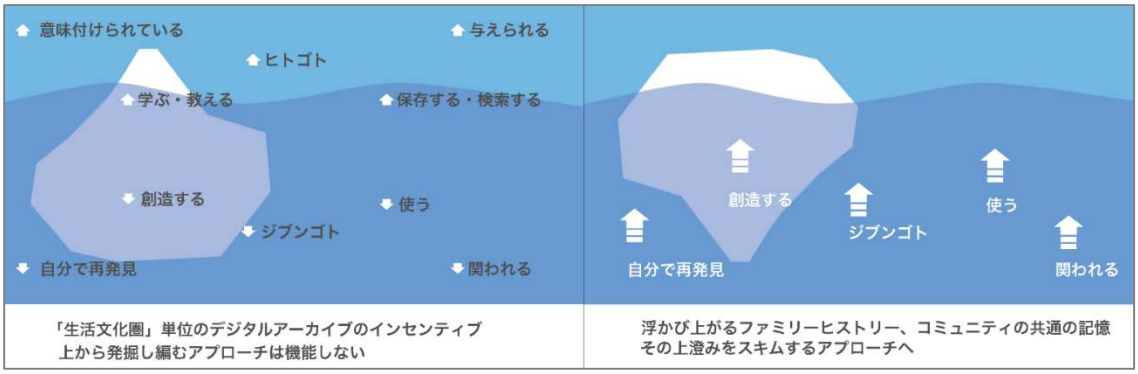

図８．平賀氏 発表スライドより

では、どうすれば「再発見」「創造」「ジブンゴト」「使う」「関われる」状況が作れるのかということを考えなくてはならない。例えば「高遠ぶらりプロジェクト」では、「防災・減災」や「地域の鉄道（エネルギー地産地消）」、「地域の建築・街並み」「地域の地形・地質（教育・観光プログラム）」「地域の民族芸能・芸術（観光・地域PR）」といった試みをしている。上から目線ではなく、自分で興味を持てるような身近な話から始まり、それがひいては企業や地域のブラン

ドや、観光資源とった話に繋がっていけばよいのではないか。このようなアプローチの違いを考え、そのための情報基盤、データのオープンの仕方はどのようなものが必要なのかを考えたい。街の人たちが自分たちで街の移り変わりの資料であったり、或いは自分の家族の情報を自分たちでデジタル化し、保存し、活用して、街づくりに生かす。このような動きの中で、MLA、或いはMALUI（M,L,AにUniversity, Industryが加わった枠組み）がどう連携して基盤を用意し、活動を活性化し、コミュニティを作り、参加型プログラムを作っていくのか。今回のテーマである「再価値化」とは、「皆さんが再価値化する」ための基盤をどうするのかということを、我々MALUIが考えていく必要がある、ということだと考えている。

（司会）MLA連携がデジタルな世界が前提だとすれば、どのようなシステム的な基盤があれば実現できるのか。その担い手が、従来の館側の立場の人たちだけではなく、活用する側の人たちに参画していただくには、どんな基盤があったらよいのかというお話をしていただいた。また、「今まさに待ったなしの状態で失われつつあるのは、それを大事だと思っていない、あなたの持っているモノのことかもしれない」という、身近に迫ってくるようなお話をしていただいた。

この後は、第2部のディスカッションで、第1部の質疑応答を含めて議論を深めていきたい。

２．【第2部】ディスカッション

（モデレータ：渡邉館長）

まず、第1部の質疑応答から始めたいが・・・、特にないようなのでディスカッションに入る。

図９．第２部　ディスカッションの様子

もともとこのフォーラムは、「MLA連携について関係者で一緒に考えてみること」から始めた。なかなか一つのゴールに収束させるのは難しく、或いは逆にそうしてはいけないとも考えている。

第1部の話を聴いてわかるとおり、それぞれの館が歴史的な経緯を抱えており、役割を分担してこの何十年か活動してきた。しかし、その役割の分担自体がそろそろ機能不全を起こしつつあるのではないか。分担が壁になって違うことが出来なくなっているのではないかという課題意識を持っている。それぞれが話したことがどこに向かうのかということは、これからのディスカッション次第だろう。

話のきっかけとして、サバティカル（研究休暇）中の信州大学人文学部の金井先生から、『【関

連報告】ヴェネツィアから思うMLA』[1)]を寄せていただいたので、取り上げたい。報告では、20年前にヴェネツィアに滞在した時と今回の違いが述べられている。一つは、「ヴェネツィアの全ての図書館の資料がOPACによって外部からも検索可能になった」こと、さらに「国が運営するシステムIl Polo SBN di Venezia（http://polovea.sebina.it/SebinaOpac/Opac）によって、5つの図書館に加え、ヴェネツィア市内の国立アーカイヴ、美術アカデミー、公立・私立の美術館図書室の図書資料が統合的・横断的に検索可能になった」。つまり、各館の所蔵図書資料を調べる環境としては、MLA連携が既に実現しているということである。もう一つは、展示のあり方の変化が述べられている。「Gravity」（ローマ国立21世紀美術館）という展示では、「展会場内にリーディングルームが用意され、重力・宇宙・地球に関する関連書籍が閲覧可能になっていた。重要なのは、その閲覧空間が、既存の図書閲覧室・資料室とは異なって、展覧会の流れの中に物理的にもデザイン的にも、きわめて有機的に組み込まれて」おり、「MとLの境界融合事例としても非常に興味深い」というコメントが寄せられている。「見る」人間が「読む」或いは「勉強する」人間であり、それぞれの展示が作られていくという、こうした展示のあり方は主流になりつつあるのだろうか？

（松本参与）

金井さんが紹介している展示に即応するかわからないが、「美術を展示」してそれを「文字で説明」する形は完全に一時代前の話になった。例えば、発表でも取り上げた『岸田劉生 作品と資料』の展示目録を見ると、作品だけではなく日記も展示していることがわかる。このように、日記や写真のようなアーカイバルなモノを、絵と併せて展示したりするのは、展示スタイルの変化として特筆されるべきものと思う。また、自然科学と芸術が、例えば「グラフィック化」という手法によって垣根がなくなってきつつ事例もある。言葉（文字）で説明するのではなく、その説明自体を別の作品にして表現し、一緒に展示するということが起こっている。

（平賀館長）

今の展示の話は、僕らの普通の生活に結びつけて考えるとわかりやすいと思う。例えば電子書籍を読む場合、今の若い人はわからない単語が出てきたらそこを長押ししてコピーし、その場でネット上の辞書を確認したりする。最近の高校生は電子辞書すら持っていない。良し悪しは別として、全てスマホで済ませていたりする。つまり、辞書は辞書、本は本という垣根はなくなり、メディアの違いは壁ではなくなってきている。ところが情報を提供する我々館の側は、相変わらずその壁を乗り越えられてないのではないか。元々我々の間には壁はなかった。よく例示される大英博物館は、真ん中のオーバル・ルームが図書館で、その外に博物館があり、その外にリアルな世界が広がっていた。図書館や博物館は、知ることへの障壁を乗り越えようとしてきたわけで、展示のあり方もそのような形になってきた。本の読み方も変わって来たということではないか。

（青木部長）

やはりよく解っていないので、率直にお聞きしたい。自分自身、田中芳男の展示を作り発表で聞いてもらった立場として、『筑摩県絵図』や『教草』を皆さんに提示しているのはなぜか考えてみてほしい。MLA連携において自分が期待しているのは、「驚き」をどうやって作り出すのかということに対する、それぞれの館の皆さんの考えを聞いてみたいということである。例えば『筑摩県絵図』は、私にとっては驚きである。この絵図が何年にできたのか、といったことは誰にでもわかる。しかし、絵そのものが持つ迫力は、言葉では表現しにくい。実は、筑摩県はこの絵図が描かれた後、すぐに廃止されてしまう。「廃止されることが分かっていたのに、ここまでのものを描いたのか」と驚いたが、実は分かっていなかったのではないか。それだけ、筑摩県の消滅は歴史上異常な出来事だった。それを知った上で見ることによる迫力がある。また、「教え草」については（笹本館長から指摘を受けたことなのだが)、澱粉を作る植物を集めた絵の中に、毒草まで描かれている。田中芳男が生まれたのは、天保の飢饉の年だった。生きていくため食物をどうやって手に入れるのか。そのギリギリのところで人間たちが育てた知恵が、この絵の中にある。こういうことを読み解く驚きの中から、これから生きていく私たちが食物について何を考えていくのかを問いかける、展示はそうでなければならないと思う。自分は小さな驚きが大きな発見に繋がるというのが好きである。驚きのない単なる知識は、田中が一番嫌ったことではないか。情報の究極の終着点には人間がいて、驚いて、喜んで、泣いて、そういう人たちが集まって議論を交わす場を私たち歴史館は用意したいと思っているし、MLAというコンピュータネットワークの中でそういう空間が出来上がったとしても、絶えず顔と顔が見えるような場で驚きから理解が深まっていく、ということを大切にしたい。

（渡邉館長）

金井先生の報告からディスカッションを始めた意図は、「考える行為が常にミュージアム側にある訳ではない」ということを考えてみたかったからだ。展示を作る時に使ったさまざまな研究書がそこに置いてあるのは、おそらくその展示を補強するためではなく、展示を見る人間が本を手に取って、主体的に考える機会を提供しているのだと思う。ミュージアム側が一定の提案をすることは大切で、そうでないと展示は成立しない。しかしそれを見る人間が「理解」して「学んで」帰るだけではなくて、同じ側に立って「考える」楽しみを持ち、むしろ新たな発見に携わる可能性を環境として提案しているのではないか。価値を作っていく主体が見る側へと移っていくこと、見る人間も考え・提示する場に入っていくこと自体が、MLA連携の一つのモデルになるのではないかと思っている。そうであるならば、見る側の人間にも同じだけの資料・情報が提供されなければならないだろうと思うのだが、どうだろうか。フロアの方からの意見・質問があれば、お願いしたい。

（フロアからの意見）

信州大学の森です。司会の立場だが、質問させていただきたい。4人の登壇者の方々の話を聴いて、共通点があると感じつつも、なかなか手が届かないようなもどかしさを感じた。例えば、

個人的な経験であるが、先週末実家の高松に帰省した際、母に郷土料理のレシピを聞いて「クックパッド」というサービスに登録してみた。しかしそれは単に私の母のレシピであって、人様に役に立つかどうかわからない。郷土料理にはその研究者や専門家がいて、然るべきところに然るべき人がちゃんと資料を保存して提示してくれるのを見ればいいので、私なんかが情報提供をするなんて、意味が有るのか分からないと普通は思ってしまう。MLA連携ではそういう所にもアプローチをしようとしている、という話でよいのでしょうか？

（平賀館長）

そのとおりだと思う。県立長野図書館では、今「共に学び共に創る」ことを目指して話をしている。かつては図書館の司書が「最も適した情報を届ける」という役割を担っていたが、特に公共図書館では、来る人の方がよほど詳しいということも多い。でも「更に知りたい」といって図書館に来る。しかし司書はその件については素人。という状況では、一緒に考えてやっていくしかないというのが正直なところ。しかしその中でも、一定の知り方、学び方を知っていただくことは大事で、その点では教えるというスタンスが必要だろうし、一定の本や情報を一定のかたまりにして提示することも必要かもしれない。そのバランスが重要で、皆んなが持ち寄り、皆んなが使えるということが大事なのではないかと考えている。

（フロアからの意見）

そうすると、自分はたまたま「クックパッド」というサービスを使ってみたが、先ほど平賀館長が提示された新しい情報プラットフォームは、その長野県版を作ろうとしているということなのでしょうか？

（平賀館長）

その仕組みが、どうすれば作れるのかはまだ見えていない。先ほど飯田の例を出したが、例えば田中芳男について調べようとして飯田の検索システムを使ったら、「あら、国会図書館のほうのデータから田中芳男の絵が出てきちゃった」という状況がある。これは一つの驚きだろう。金井先生が書かれているセレンディピティ、思いもしなかったものに出会える場を作りたいと考えている。

（フロアからの意見）

信州大学の福島です。歴史館と信州大学の両方に属している立場からお話したい。今から二十三年前、当時はまだネット上の情報は皆無だったので、どうやったら来た人に目の前にあるものを実感を持って見て貰えるのか考えた。当時流行っていたのが、広島県立歴史博物館から発した「実物大環境復元」で、かつて存在したものを情景や時間を含めて目の前に再現するという手法である。今は金銭的にも厳しいので、小さい模型で示されることが多いが、歴史館では、縄文時代、近世の善光寺・農家、近代の蚕糸工場を復元した。そこへ行くと展示物しかなく、説明も人

もない。何を狙ったかというと「そこに入った人が何を感じるか」ということだったが、「解らない」という声も多く聞かれ、大変難しかった。徐々に手を加えたが、なるべく解説らしくない解説を工夫しようということで、展示の意図を説明した紙を置くところからスタートした。また、「周辺展示」として通常の博物館の展示にあるようなガラスケースの中にモノを置き、詳細な解説を付けたものも用意し、「メイン展示」である環境復元を補う展示も行った。さらに、VHSを使った映像や音などで疑似的なマルチメディア環境を作り、融合させるという手法を使った。要するに、松本先生のおっしゃる内なるMLA連携を館内でどのように実現するかということを試みた。当時、博物館の図書室は児童向けの本や事典類が置いてある小規模なものが多かったが、歴史館は公文書館の位置づけもあったので、図書室・閲覧室を作ることができた。「展示室を見終わって疑問に思ったことがあれば、ぜひ調べてください」「我々学芸員も当番で図書室に座っているので、展示室にいる解説員に聞いて解らないことがあれば、学芸員が飛んで行って解説します」という体制を取っていた。当時可能だった内なるMLA連携を精一杯やっていた。

それが、二十数年後になると、ネット上で実現できてしまうという全くベクトルの違うMLA連携が出て来た。青木さんが言っているのは、内なるMLA連携のうち、実物を、本物に触れる世界を大事にするスタンスだろう。言っていることは違うようだが、実は目指していることは同じなのではないかと思いながら聞いていた。

（松本参与）

MLA連携というと、どうしてもコンピュータ上のデータが同じ土俵の上で連携できるという話になるが、裏の連携というか、一見してモノとして異なるものがネットに上がれば上がるほど、ネットの世界から実物の世界に戻らないといけないのではないか、という面があると思う。

（青木部長）

今、各館は情報発信が強く求められているが、自分が一番大事にしたいのは、モノを残していくことである。やがて10年20年30年後に、長野県の行政資料を調べようと来るだろう。『筑摩県絵図』についても、我々が発見したということではない。他県の人が見に来ている。何か気づいた時に確実に保管し、また活用できるような体制を我々は維持し、活用する人が来るのを待つ。そのためにも保存が最も重要だと思っている。もちろん、何を所蔵しているか、それでもってどういう研究が進められているのかという情報は出していくし、随時展示でも出していく。同じように図書館も、長く残すべき文献を保存し、その資料の良さを伝えること、その本を手に取って読む人を増やすことが必要なのではないか。田中芳男の展示に「種をまく人」というキーワードがある。これはポール・シュライマンの『種をまく人』という小説がきっかけとなった。一人の女の子が種をまいたことから、ゴミ捨て場がやがて変わっていくという物語のように、何かのきっかけを作ること。それぞれの館がそれぞれ伝えたいもの、気付いてほしいものを各機関がきっちり保存しながら、もっとたくさんの人が現物に触れてもらうことによって、心に灯をともすような存在でありたい。いずれ来てくれることを信じて良いものを残していきたい。貴重本という

のがよく解らないのだが、良いものという意味は、希少性だけではないと思う。現在の我々にプラスであることも大事だが、もっと先の人のことを考え、保存する役割があるので、なかなか情報発信に動いて行けないのが現実である。

（平賀館長）

貴重本ということで、先ほどの「再価値化」に関して渡邉先生に質問したい。「意味づけをして、取捨選択して残す」という楽しみを、もっとたくさんの人に経験したいという話だった。それがいかにして可能か。リアルな本はワンセットしかなく、残ったものは先生たちが再価値化したもの。目録はあるので、実物ではないけれどもバーチャルでの再現は可能だと思うが、その中でどういう体験が可能なのだろうか。

（渡邉館長）

おそらく一番問題なのは、あのまま箱に入っていて一切使われないことだろう。使ってもらうために一番良いのは全てを並べられる箱を用意することで、ドラえもんみたいなのがいたら何とでもなっちゃうのだが、現実的ではない。最低限使える状況を作るための「選択」の話なので、実はあまり良い話ではなかったりする。しかし、箱を開けてみて図書館の蔵書と同じものだったら、そのまま仕舞っちゃえばいいのか、というとそうでもなくて、「古い本」として別の意味付けができるかもしれないと考え、「同じ本があるから使わない」ということではなく、改めて再価値化を行った。重複本を物理的なモノとしてすべて取っておくことはできないが、デジタルで目録を作っておけば復元はできる。また、希少性は貴重本とは少し違うが、希少であるならば残しておかなければ何処にもなくなってしまうので、取っておくことに意味が有るだろうと思う。これは、大学図書館にある本だけではなく、普通にお宅にある本でも同じことが言えるかもしれない。大学では「師範学校」という価値を引き出してみたが、さきほどの「クックパッド」と同じように、お宅の歴史として改めて価値化すれば、いろんなものがいろんな形で価値を生み出す、皆んなが楽しめるものに変わっていくだろうと考えている。単純に楽しんでもらいたいということだ。

（フロアからの意見）

東京国立近代美術館の水谷です。話を聴かせていただき、2点ほど感想めいたことを述べたい。MLA連携がいろいろなところで話題になるようになったのは、2000年代に入ってからだった。それは、デジタルアーカイブとインターネットが成熟した形でMLAの中に入って来たからではあるが、仲間内ではもっと早く、1989年頃には議論が始まっていた。きっかけは、松本さんの話に出て来た岸田劉生のアーカイブが入ったことを直接的な契機としている。つまり、デジタルとネットワークはMLA連携のとても重要な要素ではあるが、青木さんが言われるように、リアルな資料、リアルな空間、リアルな人において、発見があるというのが楽しいしハッピーだし、可能性を感じさせるものだと思う。

もう一つは、せっかく信州大学という大学においてMLA連携が語られているのでお話したい。いろいろな大学の学芸員課程の必須科目である博物館情報・メディア論を担当している。例えば、東京大学の授業では、医学部以外ほとんどすべての学部から学生が集まって来て、最終レポートでMLA連携の事例を探すという課題を出している。人文だけではなく、理科系も工学系もさまざまな学生が事例を探してくる。事例を探す行為はおそらく、希望的観測以上の意味が有ると思っているのが、調査研究のメソッドの一つになるのではないかと思っている。例えば卒論や修論を前にして、MLA連携の事例を探すというステップが置ければ、新たな論が展開されるような良いレポートが出てくるのではないか。MLA連携は、美術館や博物館、図書館や文書館といった社会的なファンクションの中だけで展開されるのではなく、大学の教育の中でも、学問的なところにアプローチするためのメソッドとして使えるのではないかと考えている。

（平賀館長）

大学の中だけではなく、我々の暮らしの中でもMLA連携は見つかるかもしれない。僕らは普段、殆ど無意識のうちに暮らしている。この電気はどうしてついているんだろう。どこから来ているんだろうなんていうことは、思いはしない。自分が住んでいる伊那で、「伊那電気鉄道が100周年なので調べてみよう」と思ったら、「地元の人たちが会社を作って、電気を作って、電車を走らせちゃったのね」、ということが分かって楽しかった。普段の暮らしの外側にアーカイブや博物館やライブラリーがあって、果たせる役割というのは大きいと思っているし、それが気楽にできる基盤として、デジタルな世界でできることがあったら楽しいなと思っている。水谷さんがおっしゃったような、ある意味「知の基盤」としてそれを考えていくようなことをしたいといつも思っている。

（渡邉館長）

ちょっとだけ、自分の研究の話をしたい。私はお寺の調査をずっとやっていて実際にそこで対象にするのは、MLA全てである。実際に文書が読めなければできないし、置いてある絵画が扱えなければ、その時代に過ごした人々の姿が見えないし、学生の頃からずっと調査をしたり論文を書く時には博物館に行き、図書館に行き、美術館に行って見せてくれと言ってダメと言われて・・・というのがあるので、積年の恨みがどこかにある（笑）。だから、ぜったい連携させてやるという想いが個人的にある。そうした方がいろいろなことが分かるし、絶対楽しいと思う。それが、自分が皆さんとMLA連携について話したい根幹にあるものだということは間違いない。ではそれが、大学自体でどれくらい可能なのか、出来ているのかと問われれば、おっしゃるとおり、出来るようにしておかなければならないと思うので、課題にさせていただきたい。

議論は尽きないが、時間が来ているので、そろそろこの辺で。まとめとしては「皆さんで一緒に考えましょう」ということで締めたい。

（司会）

シナリオ上は、ここで「まとまらない話を敢えてまとめてみる」ということになっていたが、最初にも話があったように、この場は一つの結論を得る場ではないということではない。今日の参加者の皆さまお一人お一人が感じられたことが有ると思うので、考えて頂けたら良いのではないかと思う。最後に、主催者の一人として平賀館長から閉会のご挨拶をいただきたい。

（平賀館長）

「それぞれが考えればいいですね」という話ではあるのですが、まさにそれが可能になる基盤を考えるということではないかと思う。図書館が情報基盤をどう再構築していくかを考えるうえで、図書館のことだけを考えるのではなく、皆んなで一緒に考えていこうよと思って、この場にいる。一緒に出来ることもあり、同じようであり違うこともある中で、是非ご協力いただきたいと考えている。コンテンツだけではなく、空間も同じで、リアルな場で「共に学び共に創る」というコンセプトで、コ・ラーニングスペースを作ろうとしている。そういった場に、MLA或いはMALUIに限らず、皆さんに参画していただきたい。

ということで、信州 知の連携フォーラム（第3回）で、またお会いしましょう！

注

1) 信州知の連携フォーラム（第2回）発表資料
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1867
（参照2018-11-30）

2) 長野県立歴史館 平成29年度冬季展『田中芳男－「虫捕御用」の明治維新－』
https://www.npmh.net/up_img/bok_img/bok603559.pdf（参照2018-11-30）

3) 水谷長志「研究文献レビュー：MLA連携－アート・ドキュメンテーションからのアプローチ」カレントアウェアネス．No.308（2011.6.20）
http://hdl.handle.net/10091/00019833（参照2018-11-30）

4) 『学友』目次（信州大学教育学部ウェブサイト「卒業生の方へ」）
http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/graduate/（参照2019-01-30）

5) 信州知の連携フォーラム（第1回）発表資料
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1780
（参照2018-11-30）

6) 内閣府知的財産戦略推進事務局「デジタルアーカイブに関する取り組みについて」（2017.9）
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_suisiniinkai/suisin/dai1/siryou1.pdf
（参照 2018-11-30）

7) 長野県「信州デジくら」
https://www.pref.nagano.lg.jp/joho/kensei/tokei/johoka/digikura/（参照2018-11-30）